

第2回こどもプロジェクト企画ボード

俳句・Haiku の魅力と子どもへの誘い ダイアログ

参加者：

加藤 耕子 俳人・俳誌「耕」主宰・国際俳句交流協会理事

天野 正子 東京女学館大学副学長

江藤 裕之 長野県看護大学(外国語講座)助教授

土屋 薫 江戸川大学社会学部助教授

松田 義幸 実践女子大学生生活文化学科教授・森永エンゼル財団理事

須賀 由紀子 エンゼル財団主任研究員

森永エンゼル財団

ダイアログ 俳句・子ども・国際化

①英語俳句について



【加藤】伊賀上野の芭蕉祭で英語俳句の選者をやっています。芸術的に薰り高い俳句も出されるようになり、私もこんなにすごい俳句を作る人がいるのかと驚くのですが、今年は非常に身近な俳句が出てきました。どんな句かご紹介しましょう。

Father's day－

I turn the final page
of my dead son's diary.

「父の日や逆縁の子の日記閉づ」(耕子訳)

father's day が季語です。逆縁で、息子さんが先に死んでしまったお父さんが、子供の日記を繰っていらっしゃる、その気持ちを俳句にしたものです。ベルギーの方の俳句ですが、こういう作品を見ると、「外国人に俳句がわかりますか」という日本人に、「日本人だから、俳句がわかるのでしょうか」という質問を出したくらい、心の中は一緒ではないでしょうか。そのことを感じさせられる作品です。

それから、秋の野原を自転車でさっそうと走っていく様子：

In the autumn field
the bicycle is
changing into the wind.

「野路の秋自転車風となりゆけり」(耕子訳)

自転車が風になって“changeing into the wind”というところで詩になります。これは日本人の方の英語俳句です。心に描く内容がよければ、自然にやさしい言葉は付いてくる。難しい言葉を辞書で引かなくても、中学ぐらいの英語でも、すばらしい英語の俳句が作れます。

②子どもを俳句に誘うために



【天野】知育よりも、詩心をどう育てるか。その1つの可能性が俳句にはあると感じますが、季語や五七五という俳句の決まりは、何歳頃から子供にわかるものでしょうか。幼児でも可能でしょうか。

それから、「俳句を作る」よりも前に、言葉のリズム感が大切で、そのためには、俳句を暗唱することが大事なのではないか。まずは言葉のリズム感を身に付けて、そこから作ることへ持ってい

くのが自然なのではないか。生活の中の言葉や自然がはらんでいる本質をスパッと詠むのは、いきなりは難しいのではないのでしょうか。

【加藤】リズム感はとても大切です。私は、わからなくてもよいから古典を暗唱してほしいと思っています。

【天野】古典というと、蕪村や芭蕉などですか。

【加藤】そうではなくて、いわゆる古文です。「祇園精舎の鐘の声、沙羅双樹の花の色」と、わからなくてもリズムがありますでしょう。ああいうものは身にしみますね。

【天野】文学的リズム感がまず子供の心の中に育ち、それから俳句の五・七・五がわかり、自然を詠うときに重要な季語がだんだんわかってきて、俳句に接近していくという順序ということですね。

【加藤】私たちの育った時代の歌は皆、五七調でしたね。美しい調べを持っていた。ですから、何となしに季語が自然に体に入っているのです。いまの子どもは、にぎやかな音で体を振ったりするほうに動いていますが、そうではない五七の調べを持った美しい言葉を大事にして覚えてほしいと思います。

芭蕉の生誕地・伊賀上野では幼稚園でも俳句をやっています。たとえば、こんな作品があります。

「みずでっぼうかみなりさんまでとどくかな」

この「かな」は「とどくかな」の「かな」です。

「せみがいたかたぐるましてもとどかない」

子どもからポッと出た言葉でしょうね。それを先生が書き留められたのではないかと思います。

「たんぼぼがどうろをわってさいてるよ」

保育園の子供の作品です。こういう作品は、やはり幼稚園の先生がその気持ちを持って指導をなさることが必要でしょう。

それから、今の小学生は非常に知的で、「カレンダーで秋分の日だから秋だ」と言うのですね。季節を映し出す言葉をあまり持っていないように思います。ですから、俳句に使う表現を引き出すためには、たとえば「きょうの風はどんな感じ？」ということをして短い言葉を言わせていくと、何人かいろいろな表現が出てきます。そんな工夫も必要です。



【土屋】「映画を子どもたちにどう教えるか」という授業を見せてもらったことがあります。しかし、どうしても言葉による説明を、つまりこの映画を見てどう思ったのかを、一生懸命言葉にさせてしまうのですね。

それも意味はあると思うのですが、言葉で表現しきれない部分も映画の技です。そうになると、俳句を教えるときに、作品を鑑賞しながら意味の広がり伝えていく方法も一つだと思いますが、説明ではない形で、言葉に頼り切らないように、どのように教えていくか、という方向もあるのではないかと思います。先生は、俳句を子どもたちにどのように教えられますか。

【加藤】まずは基本のお手本は示します。でも、「身近なテーマでいい」というと、けっこう子どもは自分で作ります。字余りでもよいから、それから自分が伝えたいことの情景を短文でもよいか書いてごらんと言います。それで紙を集めて、「あなたの一番うれしいことはここでしょう」「この言葉とこの言葉で俳句になるじゃない」と、パッパッと言葉をピックアップしてやる。言葉が足りなくても、気持ちが伝わればそれでよいのです。

最初からできあがったものを持ってくる子もいます。季語ばかりの子もいます。それはとやかく言う必要はありません。自分の気持ちを言葉の中にどのように込めたかが大事で、たいてい一緒になって笑ってやればよいのです。「私もこんなことあったわ。そう、君も」と、相手に同調してあげれば、「またやろうかな」という気になります。それは教師の醍醐味ではないでしょうか。大人の教室の場合も同じです。

やはり情操教育ですから、一緒に楽しむことが一番大事です。その人の作ったものにはどこかに見どころがあるのですから。



【須賀】そのような指導に出会えればよいのですが、実際、いま学校の中では俳句教育はどのようにされているか、ご存じですか。

【加藤】俳句は、今あまりなさらないようですね。「読んでおしまい」でしょう。せめて、音読だけでも経験させてあげてほしいと思います。リズムのよい言葉は生きる力になるのです。

【松田】むしろ、外国での俳句教育に、学べるかもしれません。以前、ニューヨークの下町の小学校の高学年での授業を見たことがあるのですが、「俳句の基本」を先生が最初 20 分ぐらい説明するのです。そして、夏休みの思い出を皆に思い浮かばせて、俳句を作らせるのです。この学校では、自然を大切に育てる心を育てるために、俳句教育に力を入れておられるということでした。

【加藤】私もアメリカで印象的な授業に出会ったことがあります。俳句ではありませんが、サンフランシスコの学校でヘミングウェイの文学の導入に、先生が一人ひとりの生徒に、学校へ来るまでに、何を見たか、どんなことがあったかを言わせるのです。自分の体験を話すことは、子どもたちは喜びます。それから、ヘミングウェイの自然描写の文章で、この作家は何を見て書いているかの導入に持っていかれたのです。「よくものを見る」、そして、文学作品との距離を縮めるという、そういう授業でした。子供の体験からヘミングウェイの自然描写を見ることができれば、文学が生きますね。そして、「いま生きていることがすなわち文学なのだ」と結びつけることができます。



【天野】子供の俳句はどれもすばらしい、光の当て方が皆違って、それぞれの子の力が引き出されている。やはりうまい・下手は子供の俳句には関係ないということですね。

【加藤】はい。ですから、そういうものも救い上げていくような指導があつて

ほしいと思います。



【松田】それは音楽やスポーツでも同じですね。すべての領域で、うまい・下手、早い・遅い、強い・弱いという基準が、しみ込みすぎているように思います。自分の気持ちをどれだけ素直に表現したかに判断基準を置けば、もっと子供たちがのびのびするのでしょうか。

【天野】それは子供の俳句の場合、重要な視点でしょうね。

【加藤】「褒めて育てる」の大原則です。「子供は褒めて育てて、怒るときも膝の上に乗せて、よしよしと言っておいてから、ここがいけないとびしっと話す」という子育てと同じです。



【土屋】句会を持つことに意味があると思いますが、子供を対象にした句会はあるのか、それが普通なのか、うまくいくのか。

【加藤】そうですね。むしろ、校外学習などで活用してほしいですね。俳句でもなくても、詩でもいいですから、お互いに喜び合うものがあったらよいのではないかと思います。しかし、「何しろ時間がない」というのに押し切られてしまっているようですね。

ある学校の先生の話で、ゆっくりと墨をすること始めさせて、筆に含ませて、そして、大きく書かせる。そして、そのあとで俳句を導入なさるという話も聞きましたが、ごく一部の事例です。それが大きな流れになっているのではなく、あるところはこのようなやり方、あるところではこのようなやり方と、本当に点と点がどこかで続いている。そんな形です。

たいていは句会形式ではなくて、先生が紙を渡して、皆で話し合っって俳句を作る。場合によっては先生がそれを少し直して、生徒に返してやる。その辺りでしょう。

【土屋】句会では、同じぐらいの力の人が皆で集まってやることは可能ですか。

【加藤】やっているところもあります。たいていは自分の基準でやっていらっしゃいますから、選はバラバラになります。

先生の選には取ってもらえなかったけれども、句会の中で誰かが取ってくれた。それが非常にうれしかったから、私は俳句に進みましたという方が現実にいらっしゃいます。その方は高校の国語の先生で、生徒にも書かせる。その方法は、短いラブレターを書かせて、それに季節の言葉を1つ付けて、今度はそれを俳句の形にまとめさせるのだそうです。

人によっては季語をあてがって、その季語のイメージで作らせる方もあります。本当にいろいろです。



【加藤】反対に、俳句でこんなことをやったら面白いのではないかというご提案があったら聞かせていただきたいのですが。

【須賀】映画は時間芸術ですが、俳句はもっと絵画的ではないかと思います。それで思ったことですが、絵巻物の世界で俳句絵巻などを作るとするのはいかがでしょう。俳句絵巻です。

【加藤】芭蕉の時代はそうでしたね。画賛があって、俳句があって、それから江戸時代はいくつかの俳句があって、それぞれの絵があったという、残っているものではそういうものもありますね。

【須賀】子供たちで、クラスで俳句絵巻を作ろうというのは面白いかなと思いました。

【加藤】いまおっしゃったのは、私は大人でやってみたいと思います。展示のときに、短冊ばかり並べるのではなくて、共同でやったというものもあってもいいですね。万博のときのような写真集ではなくて、今度は絵巻ということで、これは私もやってみましょう。

【松田】デジタルの時代ですから、逆にハイテクを利用して、一番感激した一瞬をデジタルで撮って、それに自分の句を付けるというのもよいでしょうね。世界から、瞬時に応募することもありえますね。

【天野】私が小学校のときに俳句の好きな先生が担任でした。その先生の俳句を作る授業は、目を閉じて、そして聞こえてくる音とか、心に浮かんでくる情景を思い出しなさいというものでした。それで子供ながら集中力で、そこからわりとスムーズに俳句を作るところに行ったように思います。

おそらくカリキュラムの中に入れ込むことになると、いろいろな工夫が重要になるでしょうね。

【加藤】ありがとうございます。きょうのお話は、夏期の俳句指導講座で、先生方にどうぞやってみてくださいと提案したいと思います。

③外国での俳句／俳句の国際化について

【土屋】今日は英語の俳句を拝見させていただきましたが、中国語や韓国語などの俳句もありますか。

【加藤】あります。マイナーですが、昨年、中国では漢俳学会ができました。3行で、中国はやはり韻を踏むようですが、漢俳の専門の雑誌もいくつか出ています。「漢俳」という形で、中国に根付いた俳句の形です。

韓国のほうは「奥の細道」を韓国語に訳した方が何人かいらっしやると聞いています。それから、日本文学の研究者は多いです。芭蕉の研究者にも何人かお目にかかりました。ただ、その方たちが俳句を書いているかどうかは存じませんが、関心はあるようです。

【松田】外国人は、俳句をポエムとして捉えているのですか。

【加藤】立派な方はそうですが、一般の学生はいわゆる日本語習得や日本文化理解の一助としてやっています。

【松田】例えばニューヨークの小学校で、国語教育、つまり英語教育の中で、何時間か俳句を扱っていますね。

【加藤】やっています。

【松田】ですから、それは日本文化の勉強というよりは、自然の世界と気持ちや心を1つにするという意味ですね。

【加藤】もう1つ音節の教育と聞きました。タイプライターを打つときに、どこで切るかということの学習です。

そして、英語俳句は、受け入れるほうが楽しく受け入れてくれているのが事実だと思います。

英語俳句は、故佐藤和夫先生を中心に推進されました。5年間運動をやって国際俳句交流協会が出来たのが15年前です。やはり1つものができるのに最低5年はかかる感じです。

その間に、各国いろいろ回って歩きますと、日本の俳人の方から理解されない。でも、それは種を撒く仕事であって、あとから芽がふいてくるので、今は外国でもとても喜んで作っている。それを「俳句ではない」などと言う必要もありません。日本の俳句とは区別したいのであれば、別物だと思えばそれでよいのです。その辺りは、日本人の方に狭いところがあるように思います。

【松田】アメリカの方の俳句の楽しみ方は、それぞれが作ってきたものを発表するというスタイルですか。それとも日本のように吟行して、そして皆で句会を楽しむ方法も流行っているのですか。

【加藤】ほとんどが発表形式で、自分のものを相手に聞かせるという形です。ごく一部ですが、吟行スタイルもやっていたらっしゃるようです。



【江藤】以前、日本の高校生のセミナーで「柿食えば鐘が鳴るなり法隆寺」から連想するイメージを尋ねたところ、皆同じようなイメージを持つのです。必ず秋だと言うのです。いまは一年中いろいろな果物があり、季語という発想自体暮らしの中で捉えにくくなっていますが、やはりこの歌の季節は、秋で、稲の刈ってある田んぼ、その向こうに柿の木が1本立っている。群生しているこ

とは考えられないというイメージなのです。

【加藤】古池のカエルと同じですね。

【江藤】そうですね。必ず1本ポツンということなのですね。都会のビルに囲まれて育っている現代の若い人たちも同じ感じを持つのは不思議だなと思ったことがあったのです。

日本語の俳句は、子どもが作ったものでも大人が詠んだものでも、情景がそのまま絵のように理解できて、同じような感覚を私たちは持ちます。それに対して、英語の俳句を見ると、何か背筋が伸びてしまう感じがするのです。日本語のほうは、くつろいだ感じがします。私たちはやはり英語を習うときに、どうしても姿勢正しく見てしまう。

それで思ったのですが、例えば英語ならばソネットなど、俳句という形を取らなくても伝統的な詩歌の形式があります。中国でも漢詩の形式があるなか

で、俳句という 17 音節の詩を通して、形式だけではなくて日本人が培ったものが外国に出ているのか。そうではなくて、もっと普遍的な、人間ならだれでも感じるような自然のものを、それぞれの国の人たちが、形式は 17 音節ということで作るのか。簡単に言うと、どうして世界でこの俳句という形式が取り入れられるのか、ある種盛んになるのだろうかということ。

日本人のシェイクスピアの訳など見ると、原文のほうがよいと思ったりすることもあるのですが、どうして俳句が日本以外のところで、少なくとも形式的にそういうものが受け入れられるのか。

もう 1 つは、日本人ならば言葉を通して同じようなイメージを持つことが多いのですが、そういう感覚が、異なる外国人にも伝わっていくのかどうか。

あるいはこれは日本語の俳句を英語に訳すことが問題なのではなくて、そもそもこの 17 音節という形の中にいろいろな国の言葉で入れていく、1 つの、言葉による芸術を作っていくことにウエートがあるのか。どちらなのかなということをおもっていました。

【松田】いまの話少し皆さんでも議論したいと思うのです。佐伯彰一先生から伺った話ですが、佐伯先生がカナダに行かれて日本文学を講義した時に、たまたま雪が降ってきたのだそうです。それで窓のほうに寄って、雪に関わる俳句をいくつか紹介したのだそうです。あまり反応がないように思ったので本題に移ったのだけれども、次の日の授業で「俳句の話の続きをしてくれ」と言われて、皆がすごく関心を持っていることがわかったという。「五・七・五の中に大きな宇宙が入る。それが日本の俳句の特徴で、これはだれにもできるところがすごい」と学生から大変関心を持たれたそうです。

つまり、先ほどのソネットとか中国の漢詩のスタイル、これは規則もあるし、いろいろ修練を積まないと作れない。詩は、才能のある人が作るもので、一般庶民は詩を作るものではないというのが西洋の文化です。ところが、日本の文化では、庶民が皆俳句を作る、俳句を作って楽しんでいる。そのことに対する外国の学生の驚きに、佐伯先生自身も驚いて、皆が関心を持っている意味もわかって、「俳句は国際化できる」と思われたというのです。

ですから、詩は遠い文化だと思っていたのが、日本の俳句を通じて、俳句は非常に身近な文化だと、外国の人たちが魅力に気づいているのではないかと。

【加藤】おっしゃるとおりです。まず「身近であるということ」、それから「短いということ」が一番です。

【天野】「短い」ということが近づきやすいのでしょうか。短歌だとこうはいかないのではないですか。

それからもう 1 つ宇宙が短い句の中にある。宇宙を表現するものは、1 つは季語だと思います。季語の中に宇宙や大自然の移り変わりが入っている。俳句の季語と五・七・五の形というきまりは、よくできているなあと思います。

連歌になると、五・七・五を読んで七・七と続く。あれも近世からすごく日本人の暮らしの中に非常に根付いていて、連歌の座は 1 つの社交の場となっていたのですね。

【加藤】それから連歌には、季節以外に雑の句入ります。おりはしの吹き流しのようなふわっとした、そこで息が抜ける。これはうまい方なものには、本当に感心させられます。さばきによって、連歌の面白さですね。

【天野】俳句は日本古来の最短詩、最も短い、やはりそこに最も特徴があると思います。だから、子供でもできるのですね。

【加藤】客観写生のみが俳句であるという、それも1つの流れなのでしょうけれども、そうでない座のコミュニケーションの連句の世界も大切ですね。

④俳句の魅力を暮らしの中へ

【松田】俳句を楽しんでいると、絵を思い起こす、情景を思い起こせるということがあります。ですから、俳句自身も、美術と同じように造型を楽しませる力を持っている。それから表現上の中で共生しあっている。日本の美術は文字と造型表現が非常によくバランスが取れているのです。この辺りは、西洋のポスト・モダンが求めている表現形式と一致するとのこと。

ですから、専門化、細分化したところで楽しむのではなくて、いろいろな芸術ジャンルと関わりながら、全体で楽しめる方向が望まれると思います。

【加藤】松尾芭蕉が「笈の小文」のところで「西行の和歌における、宋祇の連歌における、雪舟の繪における、利休の茶における、其貫道する物は一なり。しかも風雅におけるもの、造化にしたがひて四時を友とす」と言っています。高浜虚子は「花鳥諷詠」—ただ花鳥に留まらないで、あらゆるもの、人事もすべて自然のものとして皆受け入れて詠む。同じことです。

【天野】やはり、言葉の前にまず感動や共鳴する心があるはずだと思うのです。ところが、いまの子供たちは日常的な暮らしの中で感動するとか、何かに感銘を受けるとか、共鳴する場面が本当にあるのかが、1つは大きな問いになると思います。そのあたりはどうでしょう。

【松田】俳句や和歌を作る知人を見ていますと、吟行を行って、やはり感じる事が大切です。それと同じで子供たちも、感動する場面に、つまり、子供たちをもっと自然の中に連れていくことが前提に必要なのでしょうね。

【天野】ものをよく見つめる。そして自分の心をよく見つめる。その往復活動のようなことが必要でしょう。

【松田】もう1つ社会現象で、今はメール言葉が若者の主流です。それで、シグナルのコミュニケーションは上手ですが、象徴的な言語のコミュニケーションは非常に不得手で、文章表現も深みがなくなってきました。

【加藤】経済効率の流れですね。

【松田】逆に考えれば、一方がそうだから、自由時間は、ハイテクに対してハイタッチと昔よく言われていましたが、ハイタッチのほうの文化を大切にするとバランス感覚が大切だと思います。

【天野】心理学や精神医学など、心を分析する学問は非常に人気がありますが、自然をありのままうたうとか、文学的な詩心を育てる世界は、陰が薄いですね。

それから、いまは「わかりやすい」ことが非常に重要です。心理学でも、人の心をわかりやすく説明しようとしませんが、本当は複雑で微妙で錯綜して、なかなか分析などできるものではないのが心でしょう。

【加藤】心理学でセカンドオピニオンというのはないのでしょうか。

【天野】こうも読める、こうも解釈できる、こういう見方もできるよと、複眼的に見ていくのではなくて、やはりいま要求されるのは、いかにわかりやすく、シンプルに説明できるかです。

【加藤】でも、単一思考では怖いですね。

【天野】そういう点からすると、俳句はどうなのでしょう。

【松田】例えば先ほどの「静かさや岩にしみいるせみの声」では、岩の象徴性に対するセミの短命さ。その対比が年とともにいろいろな意味に響いてくるようになる。ただ単に自然現象としてセミが鳴いているというのではなくて、その背景にいろいろな読み方ができてくるようになる。たとえば、芭蕉がお仕えした藤堂藩の息子さんの俳号が蝉吟で、その人は芭蕉のよき理解者であった。その蝉吟を偲ぶ気持ちもここに込められているなどといった意味の重ねが、非常に重層化されているのですね。ですから、自分の成長に合わせて深読みが楽しめるようになってくる。そうすると、その風景もそのように見えてくる。

【加藤】そうですね。俳句は本当に面白いと思います。自分で作品を作りながら、いつもこんな面白さがあるのだなと発見しています。

(文・構成：須賀由紀子)